

はだか祭

「国府宮のはだか祭」として知られるこの祭は正式には「難追神事」(なおいしんじ)といい、毎年旧正月十三日に行なわれています。

その起源は古く、神護景雲元年(七六七年)称徳天皇の勅命によって悪疫退散の祈禱が全国の国分寺で行なわれました際、尾張国司が総社である当神社に於いても祈願したのに始まると伝えられ、古い伝統をもった神事といえます。

この神事は祈禱と神籤によって選ばれた一人の難負人(神男)を巡って、裸男達による肉弾相打つ壮絶な揉み合いを繰り広げるものです。これは、神男に触れば厄落しができるとの信仰からです。

又、当日は早朝から厄除けの御祈禱を受ける人と、御守りの「なおいざれ」等を受ける人で雑踏し、午後には裸男の集団が、裸になれない老若男女が厄除けの祈願を込めた布を結び付けた「なおいざれ」を捧げて威勢よく拜殿へ駆け込んでいく姿が見られます。

裸祭の翌日旧正月十四日午前三時に、境内東南の庁舎(ちようや)に於いて夜難追神事が行なわれます。一宮、二宮、三宮、総社の神様を神籠にお招きして天下の厄災退散の祈願をした後、神男にありとあらゆる罪穢をつき込んだものとされる土餅を背負わせ神職が大鳴鈴を振り鳴らしながらこれを追い立て境外へ追放します。そして、神男は途中で土餅を捨てて後をも見ずに帰宅し、土餅は神職の手によってその場に埋められます。これにより土から生じた罪穢悪鬼を土へ還し国土平穩に帰したと信じるのです。この神事が難追神事の本義であって、古くよりこの土餅を土中に埋める事がこの神事中最も神聖視され、重要視されています。

